

オコジョ(山黽)幻覚

たなか踏基

二匹の彼女、オコジョ(本土山黽)を二人で見た時間は、ほんの十数秒間、いやや数秒と短い時間であったかもしれない。その立止った数秒間に私と岩淵栄太郎は不思議な幻覚にとらわれた。

それはまるで、あたかもその周りだけが時間が止まったような感覚であった。ほんの数秒と一瞬の間なのに、一所に何時間も立ちつくし、北アルプスに生息する、オコジョ(本土山黽)が敏捷に虚の網膜上を動き回る姿を、没私の状況で凝視しているような感覚であった。木漏れ日の中に、出現した森の妖精がいた。

いいやそれは、木漏れ日でない。太陽光ではない。昼間の陽光と異なる、天上界から下界に降り注ぐ無彩色の独特の柔らかい光が、森全体を抱きすくめるように射しこんでいた。

その光は、どちらかと言えば月光に近い。

古来中国では、月はしばしば不老不死のイメージに重ねられて伝承されている。

月の表に見える陰翳は、日本童話では兎の餅つきに例えられるが、本当は餅つきでなく、不死の薬を杵で調合している兎が正しい。月は、地上の人間の命をも操作する神々を宿しており、時折神を地上に降ろしてくる。

じつと眺めていると、光の焦点の定まる部分の波長が変わり、二匹の彼女が、立ったままゆっくりと首を伸ばし、手足を伸ばしして、人と等身大の半裸の女神に変身していった。

然も、一人の女神の顔が異なっていた。

一人は、喜怒哀楽の思い出を紡ぐ、母なる森の褥に身を委ねる童子のように柔和な顔である。天上と下界を往復できる、まるで「竹取物語」の迦具夜比売命のような女神である。

一人は、濃密な靈気を発散させる急峻な岸壁に立ち向かつて岳人のような厳しい顔である。天上と下界を往復できる、まるで「山窩物語」の物静かで手先機用な眼光鋭い女神である。眼光鋭く幾分男性的な、中性的と言ったのが正しいかもしれないが、何故か片方の女神は、黒い山猫を一匹、自分の手足として従えている。

森の奥に死体の上がらぬ池があり、木の枝に不思議な縄が揺れた後に白骨が横たわる。二人の女神が、突然暗示するように予告して動き出す。二人の半裸の女神は、緑の帯に挟んだウメガイと言われる両刃の短剣を腰に、闇をも見透す赤外線視力を駆使して、昼夜構わず野猿のように森の中を飛び回る。

暗喩(メタファー)の謎は解らない。

眼光鋭い物静かな女神が遭難者を探し始める。柔和な顔の女神は、顔を覗き込んで、不死の薬の袋から、丸薬を取り出して遭難者の口に含ませる。時には、口移して少量の酒と一緒に飲ませてやる。常時携行する酒の皮袋のお陰で、遭難者が次々と蘇生していく。

中性的な女神のお連れ猫が、蘇生した人間の顔を、ざらりと舌でぺろりと舐めていく。蘇生人間がほっと生き帰って息をする。暫く猫は付き添っているが、やがて安堵の表情を浮かべると女神の跡を追って去る。

巖稜から滑落して、峪に落ちた岳人を、毒茸を正味した茸狩りの都会人を、高い梢から足踏み外して地上に蹲る山林伐採の杣人を、池に填まつて溺れる子供達を、姨捨山自殺願望の老人さえも、丸薬で救って歩く。

携行する丸薬の中味は上薬の丹砂である。

丁度、迦具夜比売命伝説の、不死の薬かもしれない。粉末状の硫化水銀は、鮮やかな朱色で、丹砂の名前に相応しい。

丹砂は時に、簡単な操作で銀白色にも、黒色に朱色にもまた白色にも変化する。

西洋中世の錬金術士の魔術同様、それは金属水銀、酸化水銀、硫化水銀、硫化第二水銀の化学変化を起すからだ。

迦具夜比売命とは、火の神の靈威を受けた矢の意味で、本来火矢を操る女神であるという。さしずめここでは焼岳の火口から、火山弾を飛ばす火の山の女神かもしれない。

丹砂を長年服用した人間は、死後の肉体も腐らずに、そのまま保存されるといふ。西洋でいうミイラ、日本という屍解仙であろうか？雪崩の遭難者の死体が腐らないのと同じである。水銀化合物の腐敗・殺菌作用である。

マーキ口と言われた赤チンが日本で製造中止になった久しい。正確にはマーキョロクローム、帯緑赤褐色の有機水銀化合物。

何時も女神がその後、月の宇宙船に戻ったかどうかは不明である。人命救助隊の女神、月から降臨の神々が、必ず月に戻ったとは限らない。中には、帰るのが厭になった神もいて、森に隠れ住む妖精のオコジョとなった。

今でもここ青い大地の隆起、大滝山の深い森に身を寄せて隠れ住んでいるのかも知れない。今のSF好きで、宇宙時代の子供なら、月は宇宙人の基地であり同時に宇宙船であると。思ったかもしれない。神とは宇宙人であると。私と岩淵栄太郎の二人が、山黽の幻覚は感じて、彫刻に余情の美を感じ取る齢とならば、まだ四十年の年月が必要であった。

ぼたん木の実が落ちてきた。

岩淵栄太郎は、私を背負ったまま屈んで木の実を拾った。私は、岩淵栄太郎の背負子から降りしてもらった。

了